

薬史学会通信

No. 5 1987年10月

東京都千代田区神田駿河台
日本大学理工学部薬学科内
日本薬史学会事務局

総会挨拶

日本薬史学会々長
野 上 寿

本日は薬学会の107年会の行事で御多忙中の所、日本薬史学会の昭和62年度総会に御出席を賜り有難うございます。私は昨年4月の総会で、木村雄四郎博士の後を受け会長に選任され、驚馬に鞭打ちながら幹事諸君の協力を得て会務に励んでおります。

今日は恒例により上提した議案を審議して戴き、併せて会の発展の方策について忌憚なき御意見を戴きたいと存じます。

さて、これから本会の最近の動きを御報告申し上げます。先ず会員数が一般会員、賛助会員共に急速に増加して合計250名を越えるに至りました。それに伴い、会の経済も好転して運営が円滑になってまいりました。

昨年度の会の活動としては、昨年10月11日に集談会を薬学会館で開催し、喜谷市郎右衛門氏の「海軍薬剤官の変遷」と杉原正泰博士の「医薬品包装の変遷」と題する興味ある講演を聴くことができました。

次に、薬史学発展の一助として、木村前会長時代吉井会長代行によって昭和60年10月に創刊された、気楽に読める機関誌「薬史学会通信」は回を重ねて昨年12月第4号を発行致しました。又「薬史学雑誌」は順調に刊行され、昨年度は21巻1～2号を発行しております。「薬史学会通信」並びに「薬史学雑誌」の編集については、特に皆様方の御意見を反映させ向上を図りたいと存じます。

次に海外の薬史学会との交流であります。先年本会の30周年記念号に祝辞を下された米国、西独など欧米8ヶ国の薬史学会に就任の挨拶状を送り、又日本薬局方公布100年記念パンフレットと記念切手を添えてクリスマスと新年の挨拶を送りました。このことは西独と米国の薬史学会誌に紹介されています。

又中国薬学会薬史学会の馬継興副主任委員が来日され、長沢、川瀬両幹事が面会し、中国薬学会慶祝建会80周年学術会議の1stサーキュラーを戴きましたが、この会議には薬史学の会議も含まれている由であります。国際化が叫ばれている今日、本会も国際協力を推進してゆきたいと存じます。

尚、会の財政基盤を確立せよとの御意見を戴いておりますが、私共もその必要性を痛感しており、会員並びに賛助会員の増加に務めているところであります。諸君の御協力をお願いいたします。又今年の薬史学部会では会員の研究発表が9題でしておりますが、次回からは、倍增するよう研究活動を盛んにし、ふるって成果を発表できるよう、環境作りに努力したいと考えています。

ここに、皆様喜んで戴きたいことが御座います。この度、会員の川瀬清君と高橋文さんの協同研究「ツェンベリー」の来日とその意義」に対し、(財)蓬庵社より、年50万円3ヶ年継続、都合150万円の助成金が授与されるこ

とになりました。薬学の世界で薬史学の研究に対して助成金が与えられることは、極めて希なことでありまして、斯学発展のために喜ばしいことと存じます。

もう一つは、今日の総会で、私は皆様の御賛同を得て吉井千代田氏を会則第6条により名誉会員に推薦申し上げたいと存じます。先

生は会の創立以来常任幹事、編集委員として又最近の木村会長の代行として昨年3月まで30有余年に且り本会の発展に尽されました。増々御健康で会の活動を見護って戴きたいと思えます。

以上、簡単に御座いますが開会の御挨拶を申し上げます。有難う御座います。

日本薬史学会

第1回 評議員会(1987.4.3.京都) 討議内容

本学会はじめての評議員会には、評議員26名、幹事10名、その他2名、計38名で開催されました。まず会長挨拶の後、本学会の運営について話し合わせ、予め提出されたアンケート集約の線に沿った発言がなされましたがなお幾つかの新しい意見も出されました。それらを要約しますと：

§機関誌・紙について

(意義) 学会の活性化・拡大のための原動力であることを銘記せよ。

(編集) 広範な研究分野を整理、区分して編集しては如何。例えば、オリジナル、総説啓蒙記事、書評など。

- ・相当部分を「現代史」に当てよ。
- ・医薬品(新薬)の発見、発明、開発の薬史学的研究
- ・医史、化学史、生物学(生化学・生理学を含む)の研究・考察
- ・医薬・製薬技術史(製薬産業史)、薬の歴史的评价
- ・行政面、経済面などの年次推移の研究
- ・社会的問題が発生した場合の解析(ただし実証的で再現性のある内容に限ることとする)
- ・「日本の大衆薬価格と医療用薬々価の差の変遷」などについては日本国内に適当な発表の場がない
- ・資料の細密な考証を含むすべての実証的研究が、すべての会員を同時に満足させ

ることは難かしいであろう。だが創造活動と普及活動とは双方とも必要である。

- ・編集委員会を強化して内容の充実を計れ
レフェリー制を考えよ

(体裁) 古くさいイメージがする。表紙をカラーにしては？

- ・映像資料として役立つ原色図版などが毎号あると好い。

(その他) 研究対象を伝承薬・家庭薬・保健衛生関連用具にまで広げること。

- ・啓蒙的事業として、博物館、研究所、企業などを訪問し、その記事を載せては如何。

§会員拡大

- ・地道に実績を積むこと以外に方法はない
- ・ファルマシアに広告を出したり、活動記事を送れ。
- ・会員1人が1～2名を勧誘すること。
- ・20～30歳台の人々や学生層の拡大に務めよ。この層を対象にした講演会、映画会展示会を開け。
- ・若い人が無理なら、50歳前半の人を狙って勧誘せよ。
- ・業者(とくに家庭薬)の入会に目を向けたら。
- ・町の隠れた研究者もいるのではないか。
- ・人数のみにこだわらず、質の拡大を重視せよ。
- ・現在の会の運営では300名が限度、会の

イメージや性格を変えねば所詮、500名は努力目標ということになるのか。

§ その他

- ・薬学会年会時以外に薬史学研究発表会は開催できないか、他の部会と重なって出席できない。
- ・「薬史学」という名称は古い感じがする。
- ・資料(〇〇大学一、〇〇会社一〇〇年史など)を丹念に集め、閲覧させる場所は作れないか。
- ・国際交流を望む。
- ・財政基盤を固めよ。
- ・欧米のように、薬学部薬史学の教授を置くように務めよ
- ・大学院に薬史学専攻コースが開設できる

ように努力せよ。

§ 当日出された意見

- ・化学史学会では、公害問題などの影響から、若い人の「化学離れ」があり、それ以来、中・高校生を対象にした啓蒙的事業を企画実施している。本会もそれに習うべきではないか。
- ・医史学会、化学史学会など、近接関連学会との共催事業を進めてはどうか。
- ・社会変化の激しい現代は、今月の出来ごとがもはや歴史的事項になってしまう。そこで本学会の肝入りで、「現代を書き留める」事業をしては如何。とくに地方の薬事行政史は、後で調べるのに非常な困難を伴う。

昭和61年度決算

収入の部

	予 算	決 算	増 減 △
前年繰越	119,662	119,662	0
賛助会費	480,000	795,000	315,000
一般会費	668,000	1,006,500	338,500
学生会費	4,000	0	△ 4,000
外国会費	20,000	16,500	△ 3,500
投稿料	250,000	196,710	△ 53,290
広告料	70,000	65,000	△ 5,000
雑誌販売	10,000	6,700	△ 3,300
雑	5,000	52,000	47,000
利子	3,000	2,941	△ 59
寄付	0	100,000	100,000
	1,629,662	2,344,513	714,851

支出の部

	予 算	決 算	増 減 △
印刷費	1,550,000	1,510,905	△ 39,095
通信費	60,000	83,962	23,962
事務費	9,662	940	△ 8,722
雑	10,000	61,140	51,140
	1,629,662	1,656,947	27,285

繰越残 687,566

昭和62年度予算案

収入の部

	前年度	予 算	前年比
前年繰越	119,662	687,566	567,904
賛助会費	480,000	660,000	180,000
一般会費	673,000	1,130,000	457,000
学生会費	4,000	0	△ 4,000
外国会費	15,000	20,000	5,000
投稿料	250,000	200,000	△ 50,000
広告料	70,000	60,000	△ 10,000
雑誌販売	10,000	10,000	0
雑	5,000	2,000	△ 3,000
利子	3,000	3,000	0
計	1,629,662	2,772,566	1,142,904

支出の部

	前年度	予 算	増 減 △
印刷費	1,550,000	1,750,000	200,000
通信費	60,000	100,000	40,000
事務費	9,662	50,000	40,338
雑	10,000	150,000	140,000
計	1,629,662	2,050,000	420,338
繰越金	0	722,566	722,566

会員の異動(昭和61年度決算時)

	前年度	資格変更		入 会	退 会	計
		+	-			
名誉会員		1				1
賛助会員	16	1		8	3	22
一般会員	172	2	6	62	4	226
学生会員	2		2			0
外国会員	0	4				4
計	190	8	8	70	7	253

薬史学会通信No.4 正誤

頁2,列左,行12,とが→とか
 2, 右, 23,反映→投映
 5, 左, 3,
 「申込書」→「申入書」
 5, 右, 8,共通→共用
 5,左22,右3,連文→達文

(4) 原始薬物文化の概説

宗 田 一

わが国の先史・古代史は、戦後における考古学、人類学等の研究の飛躍的進展と古典批判の成果によって、大幅に塗り変えられつつある。

しかし、これら領域における薬学系研究者の関与は、分析化学を通じて考古学に、また薬用植物学、生薬学を通じて文化人類学の領域に僅かな交流がみられる程度で、薬史研究者が直接タッチすることは、ほとんどみられない。だが、原始薬物文化を考察する上に、これら領域の成果の援用なくしては語れないので、今後の積極的な参加が必要な分野であろう。

文化背景

わが国原始時代は、地質学的には洪積世段階にまで遡り、考古学的には旧石器時代に対比され、無土器文化、プレ縄文文化と呼ばれる文化の存在が戦後確認されつつある。

洪積世がおわり沖積世に入ると、海進現象があり、大陸と離れて日本列島が形成され、この時代に土器が出現する。この時代は土器の名称によって縄文文化時代と呼ばれ、-7500～-300年頃の長期にわたるが、本質的には採集経済を脱却できず、狩猟漁撈と野生植物の採集生活がほとんどで、末期には農耕へと一部移行するが、政治的社会的発生をみてないといわれる。

しかし、オリエントでは、この時代の前半に青銅期に入っており、中国でもこの時代後期の周代に青銅器文化の全盛を迎え、晩期に相当する戦国時代には鉄器時代に入り、-3世紀末には秦、つづいて漢が起り、大帝国を建設して東アジアに君臨した。とくに漢の武帝による西域進出によって、東西交易路(い

わゆるシルクロード、また玉の道ともいわれる)が開かれ、それ以来中国は古代世界の国際貿易に直接関与するに至り、また半島における楽浪4郡の設置は、高度の中国文化を東方に伝播した。

長い間採集経済下にあった日本列島も、-3世紀頃には大陸・半島文化の影響の下に、生活様式の急速な変化が起こった。つまり、水稻栽培を主とする農耕文化の樹立と、それに結びついた金属器具の使用による技術革新である。こうして弥生文化時代に入る。

この水稻栽培技術が、どの経路で日本列島へ入ったのかは諸説粉々であるが、当時の中国で栽培されていた麦や陸稲の栽培技術をほとんど取り入れずに水稻であった点は、その後の日本人の生活を規定する運命的な事件であったとしても、弥生文化が周・秦・漢文化の波及として成立したことは間違いない。

農耕文化の発展は、剰余生産物の蓄積を可能とし、生産経済の展開は富の蓄積と階級分化とをもたらし、首長、土豪を成立させ、やがてそれらが連合して邪馬台国に象徴される連合政権を樹立する。一方、天候などに左右され易い水稻栽培には、豊作を期待する呪術をとめない、この呪術の制御は首長たる資格として重要な要件の一つでもあった。

+3世紀後半には畿内に壮大な古墳が発生、+4～7世紀の間に畿内は北九州を圧して日本列島の中心的先進地帯となった。これは、大和政権が大陸・半島と通交し、とくに+4世紀後半から+5世紀半頃に南朝鮮から新しい技術をもった渡来人を迎え入れたためとみられ、+5～6世紀になると、鉄器(武器・農具)の生産が行われるようになる。これ

は農業と手工業の分化を示唆し、やがて手工業にたずさわる集団が生まれる。こうして部民が誕生、大和政権の技術部門を担った。

この期における、わが国原始薬物文化を考える上に重要と思われる事項を、2、3挙げてみる。

土器と調理術 食物の調理が医療上重要な意味をもつものである限り、土器（とくに煮炊用）の出現のもつ意義は大きい。

後代のコシキ（甑）のように、底部に小孔の明いた土器は縄文期からみられ、弥生式土器、土師器（古墳期）ではこの形のものが植物性食物を蒸す道具とされているが、縄文期のそれは何の目的だったのか、土器と薬物の加工・利用面から考察すべき問題である。なお、かまど形土器は+5世紀後半に半島から導入され、畿内を中心に西日本で主に用いられた。

製 塩 塩が人間の生命維持に不可欠のものであり、大陸のように岩塩層をもたない日本列島において、海岸線から山間部へ居住地がすすむにつれ、塩の補給路の確保は重大な問題となる。海浜地帯における製塩技術の進展は土器の出現と不可分の関係を持ち、また製塩工人の構成についても今後の究明が待たれる。

製塩についての啓蒙的なものには、平島裕正『塩の道』オリオン社、1966；同『塩』（ものと人間の文化史）法政大出版、1973などがあり、専門書としては、広山堯道『日本製塩技術史の研究』雄山閣、1983がある。とくに後者では序章に製塩研究史の概観があり、過去の重要な研究書とその評価を掲げてあって有用で、また史料を豊富に収録して古代・中世の製塩法をかなり具体的に究明している点で、参照すべき論著である。

造 酒 酒の醸造も土器の出現によって進展した。酒は呪術社会における呪術的薬物の一つであり、集団的に大量を飲んで、酒のもたらず異常心理を経験するものだった。飲酒の

場と日は定まっていた、酒は女性の管理に属し、これをもって男子の労働を統御した。

出雲神話にみられるヤマタノ大蛇退治物語のヤシオリノ酒を、大陸系アミロ酸酵法的重醸酒とみるとき、山崎百治『東亜酸酵化学論攷』第一出版、1945；熊代幸雄・西山武一共訳『校訂・訳註、斉民要術』東大出版、1957～59は重要な示唆となる。また日本の造酒史についての論著は多いが、加藤辨三郎編『日本の酒の歴史—酒造りの歩みと研究』研成社、1977が最もまとまっているし、引用文献の明記がある。

ちなみに、神前に供える神酒（即席酒）の登場以前には、明水が供えられた。明水とは凹面の青銅鏡（厳密には鑑または方諸）を中天の月に向け、その鏡面に結ぶ夜露で、この天然の蒸留水は、「病を却りぞけ、生命を若返らせる霊力をもつ水」だった（三浦三郎「銅鏡と百薬の長」、『銅ものがたり』所収、アグネ、1967）。

製粉技術 呪術社会においては、薬物は内用・外用薬にとどまらず、魔除け・除病のため身につける護符としての宝石・玉類、身体に彩色化粧をほどこす顔料類も薬物であった限り、それらの加工・製粉技術は、当然のことながら薬史研究の領域にも入る。

玉を磨きあげるための玉砥石の出土が知られ、玉を作ることを職務とした玉作部の名が史書にみえ、それら玉作りの実態が解明されつつある。

玉作りの実態については、寺村光晴『古代玉作の研究』吉川弘文館、1966；同『古代玉作形成史の研究』同前、1980；同『翡翠（ひすい）』養神書院、1968；水野祐『句玉』学生社、1969等参照。

赤色顔料 赤色に魔を除く（防ぐ）力があることは、洋の東西ともにみられる民俗思想だった。鉄の赤色酸化物（ Fe_2O_3 、 Fe_3O_4 、ベンガラ、赭、そほ）や赤色硫化水銀（ HgS 、朱砂、丹、真赭、まそほ）は、縄文期から使

（第6ページへ）

「薬史学会文庫」の開設

明治薬大(世田谷校)における薬史学会集団会の席上で

'87年10月3日、明治薬科大学世田谷校大会議室において、大槻眞一郎教授より「薬学史の文献資料研究をとおして見たもの——ギリシア語・ラテン語などの原典研究の体験から——」と題する講演を伺った。

同教授は科学史古典研究の第一人者で、すでに「ヒポクラテス医学全集」「ディオスコリデス・薬物誌」などの研究・翻訳をはじめ、「遙かなり薬の旅」「錬金術から近代化学へ」などの科学史教育ビデオも作っておられる。

集談会では、科学教育・研究における歴史の目の必要を論じられ、次いで上記ビデオを上映され、最後に「明薬資料館」を案内して頂けた。(この件に関しては：薬学図書館32, (2), 69-86, 1987を参照のこと)

なお、講義に先立ち、中野三郎明薬大学長が挨拶され、兼ねてより野上会長名で検討方をお願いしておいた薬史学関係文献の保管・閲覧の施設「薬史学会文庫」の開設について基本的に了承する旨のお言葉を頂いた。

詳細については更に煮詰めて行くが、本会の情報センターの確立という意義をご理解いただきたいと思う。

(K)

(第5ページより)

用がみられ、弥生・古墳期を通じて、これら赤色顔料は重要なものだった。このほか鉛系のもので遅れて出現している(Pb₃O₄, 鉛丹, 黄丹; PbO, 密陀僧)。

朱は鉄化合物にくらべて遙かに貴重で、貴族階級が王族層に限定され、遺骸の朱詰め、あるいは塗布して包みくるむ手段が殯(もがり、本葬前の仮納葬)の秘事だったとされる。

埴輪(はにわ)などの施朱といわれる彩色には鉄系が多く使われているが、顔面や身体を除魔化粧に赤色顔料が用いられ、さらに土器や武器にも彩赤色されているので、このための微細化製粉技術があったことが考えられる。

古代の朱・水銀文化については、松田寿男『丹生—歴史地理学から見た日本の水銀』早大出版、1970があり、そのエッセンスが『古代の朱』学生社、1975にみられる。

松田は、史的記録にほとんど明記されない古代水銀文化を、伝説、神社、地名を手掛りとして、神社の祭祀の変遷、奉仕する住民の

変転を追い、実地踏査の上、採取資料を共同研究者の矢嶋澄作の分析をまっけて、古代水銀産地を裏付けるといふ独創的な研究方法を導入した。この松田の創意は、その後多くの研究者に採用されるに至っている。松田の研究に導かれて考古学の立場で朱の管掌氏族の組織実態を把握のを試みた市毛勲には『朱の考古学』雄山閣、1975があり、この書には古代朱の史的研究に関する主要文献が巻末に掲げられていて参考になる。

石皿とたたき石 縄文期に植物性食物をつぶしたり製粉したりするための用具と考えられている石皿とたたき石があり、6世紀以後に出現した新しい土器の須恵器は、水飛されたりしい緻密な粘土の使用がみられ、製粉における水飛技術が推定されている。

また、須恵器には深鉢形のものがあった内面が著しく磨滅して、すり鉢であったことは明らかだが、小形である点で、食物調理用の普遍的な土器ではなく、薬草のすりつぶしに使われた特殊容器ではなかったかとも考えられている。